大野城市歴史資料展示室　解説シート　考古No. 4

仲島遺跡 1

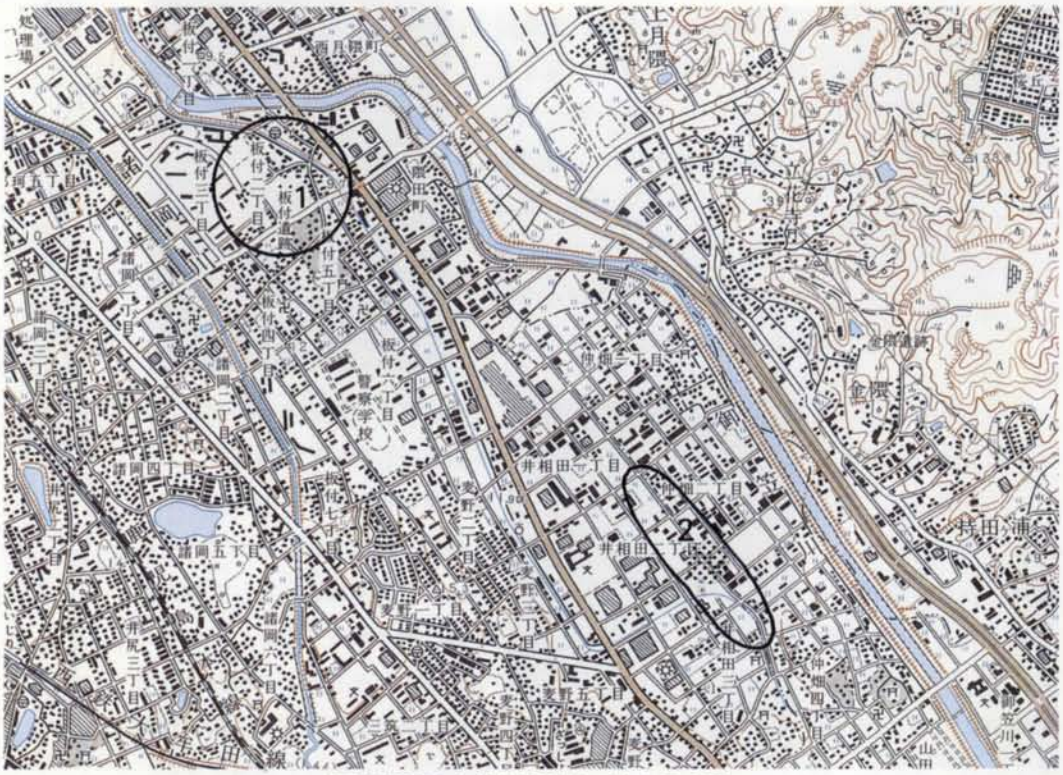
大野城市教育委員会

弥生時代前期の初めの遺跡は、朝鮮半島に近いという地理的な条件から、玄海灘沿岸で多く見つかっています。大野城市内では、そのころの遺跡はまだ見つかっていませんが、近くでは福岡市博多区に板付遺跡という有名な弥生時代最古の村の一つがあります。

この板付遺跡から南東に約 2km離れた場所に仲島遺跡があります。 この遺跡がある場所は区画整理が行われ、工場が立ち並んでいたり水田や畑があったりと、表面から見る限り遺跡がある場所には思えないかもしれません。しかし、地表を約 1m 掘り下げると遺跡が姿を現します。仲島遺跡は大野城市と福岡市にまたがる遺跡で、東西の幅約120m、南北の長さ約600m の範囲を持ちます。

時代的にみると、弥生時代中期の初めから奈良時代（約2100 年前～1200 年前）にかけての遺跡です。下の図の少し太い線で囲った部分が遺跡全体の範囲で、その中の網をかけた部分が弥生時代の遺構が見つかった所です。弥生時代の遺構からは、弥生土器、石器、青銅器などが発見されました。

このシートでは、仲島遺跡で出土した弥生時代の青銅器関係の遺物を紹介し、土器や石器および弥生時代より後の遺構や遺物については、別のシートで説明します。



板付遺跡(1)と仲島遺跡(2)（1 / 25,000）

左は『貨布』です。中国に『前漢』という国がありましたが、紀元8年に『王莽』という人物がクーデターを起こし、『新』という国を建てました。王莽は数十種類の貨幣を発行し、貨布はその一種です。長さ約5.8㎝　厚さは1～2㎜の間です。篆書という字体で、向かって右側に貨、左側に布の字があるので貨布とよびます。弥生時代の日本にはまだお金を使う制度はなく、装飾品か権威のシンボルとして扱われていたと思われます。

右上は鏡の破片です。本来は円形で、直経を復元すると8～9㎝になります。山形の文様と小さな櫛の歯のような文様が見えますが、この面は鏡の裏面です。表の面は物を写し出すために平らになっています。この鏡は『新』を滅ぼした中国の『後漢』という国で作られたものだと考えられます。その下は中国で出土した鏡で、大きさと文様が似ているので参考に掲げてみました。

左は青銅の鏃（矢じり）です。銅質が悪いため、表面はかなりはげています。長さは約2㎝です。九州の鏃は石製か鉄製のものが多く、青銅製の鏃は珍しいものです。実用品だったのか、つまり狩りや戦闘に使われたものかどうかはわかりません。

右は青銅製の鋤先です。本来はU字型に近かったものが、壊れて出土したものです。鋤は穴掘りの道具ですが、木製の本体に銅鋤先をつけて特別な儀式のために用いられたと考えられています。長さは約5㎝です。

上は銅矛の鋳型の一部です。銅矛は右の形をした青銅器で、2つ組み合わせた鋳型の中にドロドロに溶かした銅を流し込んで作ります。この鋳型は砥石として再利用され、擦り減って小さくなっているのではっきりとどの部分に当たるのかが分かりません。銅矛は朝鮮半島から伝わった武器ですが、日本では祭りの道具として独特な扱われ方を受けるようになりました。